

人生論ノート三木清

希望について

人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である。このような人生を我々は運命と称している。もし一切が必然であるなら運命というものは考えられないであろう。だがもし一切が偶然であるなら運命というものはまた考えられないであろう。偶然のものが必然の、必然のものが偶然の意味をもっている故に、人生は運命なのである。

希望は運命のごときのものである。それはいわば運命というものの符号を逆にしたものである。もし一切が必然であるなら希望というものはあり得ないであろう。しかし一切が偶然であるなら希望というものはまたあり得ないのである。

人生は運命であるように、人生は希望である。運命的な存在である人間にとって生きていることは希望を持っていることである。

自分の希望はFという女と結婚することである。自分の希望はVという町に住むことである。自分の希望はPという地位を得ることである。等々。ひとはこのやうに語っている。しかし何故にそれが希望であるのか。それは欲望というものでないのか。目的というものでないのか。或いは期待というものでないのか。希望は欲望とも、目的とも、期待とも同じではないであろう。自分が彼女に会ったのは運命であった。自分がこの土地に来たのは運命であった。自分が今の地位にいるのは運命であった。個々の出来事が私にとって運命であるのは、私の存在が全体として本来運命であるためである。希望についても同じやうに考えることができるであろう。個々の内容のものが希望と考えられるのは、人生が全体として本来希望であるためである。

人生で起きる事柄は何事も偶然だと考えていると、おもわず自分の好きな人に出会う。すると「これは会うべくして出会ったのだ」と感じる。このとき、人は相手に出会ったことを必然のように感じ、「これこそ運命だ」と感じる。

また、今は辛い状況にあるのは、すべて自分の中に理由を求めたり、すべて外に根拠づけたりすると、それは必然や偶然の産物として現れ、「どうしようもない」という気持ちにさせられる。けれども、いつかは明るい展望が開ける時が来ると信じて希望を持つとする。すると、前向きに、今の努力を続けて人は生きていける。この苦しさを運命として迎え入れ、乗り越える糧とするからである。

掲出文の筆者は三木清。一八九七年生まれ。京都帝国大学で、日本独自の哲学を切り拓いていた西田幾多郎に師事。多数の哲学書と評論を書いた。一九四五年終戦後に獄中死している。

しかし、なんとも抽象的でわかりにくい文章であろうか、哲学とはかくもわかりにくいものであろうか。そう思われるかもしれない。けれども、哲学が抽象的な言葉を多用するには理由がある。

たとえば「他者」という言葉。どうして「他人」と言わないのか。「他人」という言葉には家族や友人という概念が混在してくる。そうではなくて、自分以外のすべての存在を指す言葉を使うことで、どんな状況にも、どんな思考にも対応できる普遍性が与えられる。つまり、思考の自由が得られる。

哲学が抽象的な言葉を使うのは思考の自由を得るためなのだ。